

# より良い学習英文法の構築に向けて

—同格節に着目して—

高橋 保夫

抄録：本稿は言語学研究成果を活用した、より良い学習英文法構築の一環として、同格節に焦点をあてて考察するものである。同格節と類似した節である関係節、名詞的従属節との相違点、類似点から、意味よりも統語構造に着目した指導が有益であること主張する。

キーワード：学習英文法，同格節

## 1. はじめに

武田 (2016) では (1) のような例における that 節は同格用法の名詞節なのか、それとも別の用法なのか、検討してみる価値がある、と述べられている。

(1) I have no doubt that your book will be a big hit.

(武田 2016: 120)

武田 (2016) によると、(1) は doubt と that 節の内容は「という」と意味関係ではうまく説明できない例であり、この認知構造が複雑なために、that 節を伴った doubt の学習が難しくなっている、このような場合、I have no doubt that... で、「…に対して疑いを持っていない」という意味を表すという形で、認知構造を簡潔化する必要があるという。

本稿では、表面的に似ているけれども中身が異なっている関係節、反対に表面的には異なっているけれども、中身が似ている名詞的従属節との比較から、同格節とはどのようなものなのかを今一度確認し、学習者にはどこをポイントに提示するのがよいのか提案する<sup>1)</sup>。

## 2. 同格節と関係節<sup>2)</sup>

(2) a. She has the belief [that he is a spy].

b. She will see the man [that Tom hates].

(中島 2011: 33)

(2a) は同格節で (2b) が関係節である。表面上、(2a,b) はどちらも決定詞、名詞、that 節と並んでいて同じに見えるが、いくつかの相違点がある<sup>3)</sup>。

まず、(3b) に見るように関係節には空所 (gap) が生じる。(3b) の場合は目的語であるが、主語や補語の位置にも生じる。しかし、同格節には (3a) のように空所は生じない。また、(4a) に見るように同格節の that は省略できないが、(4b) に見るように関係節の that には省略できるものがある。そして、(5b) に見るように関係節の that は wh 句に置き換えられるが、(5a) に見るように同格節の

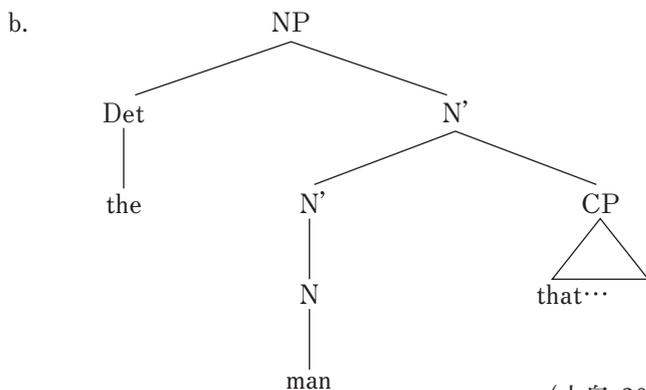
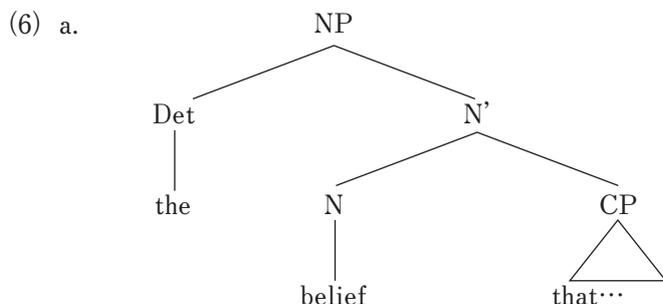
that は置き換えられない。さらには、関係節はどのような名詞（とくに普通名詞）にも続くことができるが同格節は続くことができる名詞が限られていることが相違点として挙げられる<sup>4)</sup>。

- (3) a. She has the belief [that he is a spy]. (= (2a))  
 b. She will see the man [that Tom hates \_\_\_ ].

- (4) a. \*She has the belief [he is a spy].  
 b. She will see the man [Tom hates].

- (5) a. \*She has the belief [which he is a spy].  
 b. She will see the man [who(m) Tom hates].

さらに構造も異なっていると考えられる。(2a) の構造は (6a) となり, (2b) の構造は (6b) となる。



(中島 2011: 33)

(2a) の同格節は名詞 belief の補部 (complement) として生じたものであるが, (2b) の関係節は名詞 man を中心としてできる NP 内の付加部 (adjunct) の位置に現れている。このことは, 次のテストから確認できる。

- (7) a. \*I like the idea that the world is flat better than the one that it is round.  
 b. I like the man who I saw yesterday better than the one who I saw today.

(安藤他 1993: 241)

one という代用形は N でなく N' の代わりをするという事実のためである<sup>5)</sup>.

### 3. 同格節と名詞的従属節

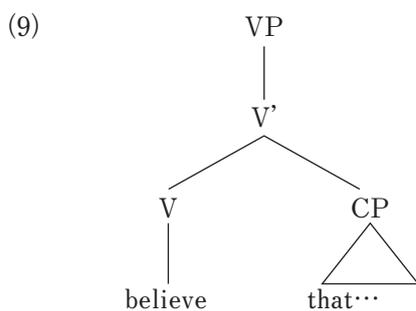
(8) a. She has the belief [that he is a spy]. (= (2a))

b. I believe [that the boy will eat this apple].

(中島 2011: 33)

(8a) が同格節で (8b) が名詞的従属節である。(8a) は決定詞, 名詞, that 節と並んでいる。一方, (8b) は動詞, that 節と並んでいて, 表面的にはそれほど似ていないように見える。

(8b) の構造は (9) のようになる。



(中島 2011: 33)

(9) を見ると (8a) の同格節が belief の補部として生じているのと同様に, (8b) の名詞的従属節も that 節が動詞 believe の補部として生じている。この2つは構造的に類似しているのである。

ところで, 中村 (2009) は動詞の型と同様に名詞にも一定の型があるとして, 同格節を「名詞+that 節」の1つとして分類している。しかし, もともと that 節をとる動詞あるいは形容詞の名詞形を同格節と区別している。

(10) a. No one can deny the fact that he told a lie.

(彼がうそをついたという事実をだれも否定できません)

b. There is a rumor that the big company will be bankrupt.

(その大企業が倒産するといううわさがあります)

(11) a. Do you believe his claim that he has already paid?

(支払いは済んでいるという彼の主張を信じますか)

b. He claimed that he had already paid.

(彼は支払いはすでに済んでいると主張した)

(12) a. I have no doubt that you will succeed.

(君が成功することに疑いをもちません)

b. I don't doubt that you will succeed.

(君が成功することを疑いません)

(13) a. There is no certainty that he will come to the meeting.

(彼が会議に来るかどうかわかりません)

- b. It isn't certain that he will come to the meeting.

(彼が会議に来るかどうかわかりません)

- (14) a. There is no evidence that the meeting actually took place.

(会議が実際に開催されたという証拠はありません)

- b. It is not evident that the meeting actually took place.

(会議が実際に開催されたということは明らかではありません)

(中村 2009: 102-103)

この中村 (2009) の分類によれば、本稿で同格節の例として扱ってきた (2a) も動詞の名詞形を使っているの、(11a) や (12a) と同じ扱いになり同格節ではなくなる。(13a) や (14a) の形容詞の名詞形も排除すると、真の同格節は fact や rumor という名詞を使った (10) だけということになる<sup>6)</sup>。

#### 4. 教育的視点からの提案

第2節で確かめたように、同格節と関係節は表面的には似ているけれども、中身に違いがある。学習者には特に、関係節には主語や目的語など欠けているところがあるけれども、同格節は完全な形をしている、ということを強調したい。それを理解することが両構文を使いこなせるようになる第一歩だと思われる。また、同格節は後置修飾 (postmodification) の一種とみなすことができるけれども<sup>7)</sup>、教育的視点からは関係節は形容詞節であり、同格節は名詞節であることを強調したほうがよいのではないだろうか。

また第3節で確かめたように、同格節と名詞的従属節は見かけよりも中身が似ている。したがって、もともと that 節を取る動詞、形容詞の名詞形を使ったものを含めて同格節とし、ただ機械的ではなく、類似性を意識させながら、対応する名詞的従属節とペアで身につくように指導してはどうか。

第1節で取り上げた武田 (2016) が指摘した「～という」では説明できない例があるという問題であるが、同格節は名詞節であるという指導があれば、「～こと」が基本であるので、(12) の中村 (2009) の日本語訳から明らかなように、それほど問題にはならないのではないだろうか。意味の問題は複雑である。たとえば、同格と含意 (entailment) の関係にまで踏み込むとたとえ平易に説明しても学習者の理解が難しくなるとされる。まずは統語的な特徴を踏まえた、ポイントを押さえた指導が必要なのではないだろうか。

#### 注

- 1) 同格 (apposition) というときさまざまな形式があるが、本稿では同格節 (appositive clauses) のみを議論の対象とする。その同格節に i) のような不定詞節 (infinitive clauses) を含む場合もあるが、本稿では that 節のみを同格節とする。

i) I hope to have a chance to play tennis with her.

- 2) 第2節と第3節は中島 (2011) に負うところが大きい。

- 3) 次の4点は、中島 (2011: 34) の練習問題の解答である。Quirk et al. (1985: 1260) でも同格節と関係節の相違点をいくつかあげているが、その中に次のような記述がある。

- ii) 同格節の that は、節構造の要素(関係節のように主語や目的語として機能する)ではなくて、一般的に名詞的 that 節がそうであるように接続詞である。
- 4) 関係節にどんな名詞が続くことができるといっても、もちろん空所と名詞の間に同一性の条件(identity condition) が満たされている場合に限られる。
- iii) \*the pencil [I met \_\_\_ yesterday]
- iv) \*I met [the pencil] yesterday
- iii) が不可能なのは iv) が不可能だからである。長原(1990: 7)
- 5) 関係詞の構造に関しては、CP と姉妹関係にあるのが N' であるという説の他に NP であるという説もある。こちらの説を支持する証拠は等位構造縮約(conjunction reduction) である。本稿では同格節と関係節の構造の違いを示すことが目的であるので、どちらを採用してもよいのだが、N' 説を採用した。この2つの説に関して、河野(2012) は明らかに相反する主張も、ある見方をすれば共存し得る主張となる、という非常に興味深い議論を展開している。
- 6) 動詞の名詞形などは別に扱う根拠として、Huddleston and Pullum (2002: 448) には次のような記述がある。
- v) [The suggestion that they cheated] was quite outrageous.
- vi) They omitted to mention [the fact that he is insolvent].
- v) では、彼らがカンニングしたことを含意しない。おそらくしていない。同格に置き換えるということは含意(entailment)を生むということである。したがって、v) のような内容節(content clause) は同格節としての資格がない。他方、vi) では彼は破産していることを含意するのである。これは fact という名詞の意味特性によるものである。
- 7) Quirk et al. (1985: 1260-1262)

## 文献

- 安藤貞雄・高見健一・天野政千代, 1993, 『生成文法講義—原理・パラメーター理論入門』北星堂書店.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K, Pullum, 2002, *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 河野継代, 2012, 『開拓社叢書 21 英語の関係節』開拓社.
- 長原幸雄, 1990, 『新英文法選書 8 関係節』大修館書店.
- 中島平三, 2011, 『ファンダメンタル英語学 改訂版』ひつじ書房.
- 中村捷, 2009, 『実例解説英文法』開拓社.
- 武田修一, 2016, 『教育英語意味論への誘い』開拓社.
- Quirk, R., Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik, 1985, *A Comprehensive Grammar of the English Language*, New York: Longman.

# **Towards a Better Way of Presenting English Grammar to Learners: Focus on Appositive Clauses**

TAKAHASHI Yasuo

**Abstract:** The aim of this paper is to investigate a better way of presenting appositive clauses to English learners through examining the various properties of those clauses and comparing them with relative clauses and content clauses. It will be shown that an approach focused on syntactic structures is better than the one focused on meaning.